

理研への研究派遣報告

所属：工学研究科 有機・高分子化学専攻

学年：博士前期課程 2年

氏名：上岡 史人

出張先：理化学研究所 袖岡有機合成化学研究室（埼玉県和光市）

出張期間：2019年11月5日～2020年1月31日

概要：ダブルメンター先である理化学研究所（理研）の袖岡先生の下で融合研究を行うために国内留学をした。研究に必要な分野の学習を行い、議論と研究を進めた。

【所感】

埼玉県和光市の理研といえば、ニホニウムの発見で有名であるが、実際に理研内部だけではなく和光市内の各所でモニュメントを見かけるほど存在感を放っていた。特に、和光市駅から理研の正門までの道路には、水素からニホニウムまでの元素プレートが埋没されており、晴れの日には周期表を覚えながら理研へと通っていた。

実際の研究は、理研の北部に位置する物質科学研究棟で、機械学習の研究をされている山口滋先生にご指導いただきつつ進めた。派遣期間が丁度、建物の設備の工事期間と重なっていたこともあり、不慣れた環境に困っていたが、他の研究室メンバーにも気にかけていただいた。また行ってすぐに歓迎会を開いて、温かく迎えてくださり有意義な研究生活を送ることができた。研究室メンバーに学生は少なく、埼玉大学などの学生が数人いるのみで多くは社会人であるため、学生の多い名古屋大学とは違い研究室は静かであった。それ以外の点においても私が普段実験をしている ITbM との違いには戸惑うことや感動することが多々あり、いくらかは名古屋でも実践しようと思っている。例えば、袖岡研究室では英語を積極的に使用しており、化学を英語で伝えられるようにするためには日々の生活で英語を使っていく必要性を感じた。

理研は教育機関ではないため、講演会は少ないと勝手に思っていたが、袖岡先生が呼ばれた David Sarlah 先生のご講演をはじめ、ITbM-CSRS など様々なセミナーや講演



理研正門前の元素プレート

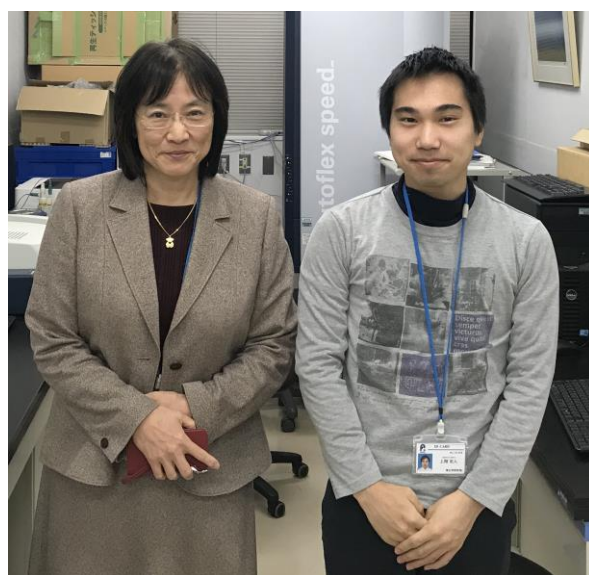
会が開かれており理研のレベルの高さを感じるとともに私自身としても非常に勉強になった。また、異分野の融合研究はこれからの研究で重要になっているのか、理研においても積極的に複数の領域を跨いだ研究が始まっている空気を感じた。

理研での生活において食堂には感激した。磁気によるレジの自動化と IC カードのみの支払いシステムにすることで非常に効率化されており、値段も安く美味しかった。更に提携する企業が時々出張営業するなどバラエティーにも富んでおり、充実していた。名古屋大学の学食ではレジが律速になっていることが多いため、ぜひ参考にさせていただきたい。

この国内留学が決まった時、まず住居を探した。予算内で理研圏内という条件の下、和光市駅から電車で 15 分程の鶴瀬駅近くのウィークリーマンションを選んだ。ウィークリーマンションは家具家電付きで引っ越しの荷物が少なくて済むこと、通常のアパートを 3 か月間借りるよりも安く済むことから最適だと考えた。しかし、借りた部屋は入居日の夜に初めて訪れたため迷ってしまった。しかも、名古屋から服などの重たい荷物を持って移動していたため、初日から疲労困憊してしまった。せめてストリートビューなどで下見をして、荷物は宅配を利用しておけば良かったと感じた。また、通学時は都会の満員電車の洗礼を浴びた。具体的には、乗車中はドアや人に挟まれて常に爪先立ちで、駅では人の波に流されて自由に動けず予想以上に疲弊したため、都会での電車利用を考えている方がいれば、住居の再考をすることを勧める。

融合研究を行うにあたって 3 か月という期間は十分長いように思っていたが、終わった今となってはむしろ短かったと感じている。今までの勉強は積み重ねの学習とは異なり、完全に新しいことを学ぶためには土台から作る必要があり、それが予想以上に大変であった。それでも現在の私は、ダブルメンターの先生とのテレビ電話によるディスカッションがあれば、融合研究を進められる自信がある。

今回、融合研究を行うにあたって、ダブルメンターを引き受けていただいた袖岡先生および指導して下さった山口滋先生とご支援をいただいた卓越大学院プログラムの皆さまに深く感謝いたします。



袖岡先生と私（右）